

Title	小島朋之氏学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1984
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.57, No.7 (1984. 7) ,p.112- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19840728-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特別記事

小島朋之氏学位請求論文審査報告

小島朋之氏提出にかかる学位請求論文「中国共産党の大衆路線——大衆運動をめぐる毛沢東の政治指導、中央および地方の政治動態」の構成は次のとおりである。

序章 大衆路線と大衆運動

第一節 「党の指導」と大衆路線

第二節 指導方法としての大衆路線

第三節 大衆運動

第一部 革命党の大衆路線——一九二一～一九三四年

第一章 地方の自立化と農民大衆の発見——一九二〇年代

における党の組織と階級的基盤

第一節 問題の所在

第二節 指導構造

第三節 指揮系統——中央と地方

第四節 階級的基盤——農民大衆の発見

第五節 むすび

第二章 地方指導者としての毛沢東——一九三〇年の富田

事変

第一節 問題の所在

第二節 事変の経過

第三節 贛西南部における権力葛藤情況

第四節 土着派としての贛西南地方党部——反毛派

第五節 革命路線

(一) 反毛派——土着派と中央の一体化

(二) 毛沢東——中央への面従腹背

第六節 まとめ

第三章 大衆路線の原型——中華ソビエト共和国時代

第一節 問題の所在

第二節 中国共産党の組織目標

第三節 農民大衆の参加類型

第四節 党の大衆観と大衆指導の方法

第五節 党が設定する「農民大衆」の範囲

第六節 基層単位における大衆路線の実態——農民大衆

の対応

(一) 郷ソビエト

(二) 貧農団

(三) 查田運動と貧農団

第七節 地方幹部——中級幹部と基層幹部

第八節 むすび

第二部 統治党の大衆路線——一九五〇～一九六〇年

第四章 一九五五年における党中央の政策決定過程——農

業集団化「運動」をめぐる毛沢東と党中央

第一節 問題の所在

第二節 毛沢東講話以前の中央の農業集団化政策——初

級合作社を中心とした集団化

(一) 合作化政策

(二) 合作化への三つの観点

(三) 合作化の発展サイクル

第三節 毛沢東講話——「農業合作化問題について」

第四節 合作化方針をめぐる中央の動向

第五節 むすび

第五章 過渡期の大衆路線——農業集団化「運動」にお

ける中央と地方

第一節 問題の所在

第二節 農業集団化「運動」開始まで——一九五五年七

月三十一日以前

(一) 中央

(二) 地方——幹部・農民大衆

第三節 農業集団化「運動」の奔出から後退へ——一九

五五年七月三十一日以後

(一) 中央

(二) 中央の指導工作と地方の反応

第四節 むすび

第六章 一九五八年における党中央の政策決定過程——人

民公社化「運動」をめぐる毛沢東と党中央との合

意成立のメカニズム

第一節 問題の所在

第二節 一九五八年における党内の見解不統一の存続

第三節 中央における人民公社化「運動」の登場過程

(一) 大躍進と人民公社化

(二) 人民公社化への大転換

第四節 合意成立の諸要因

第七章 大躍進期の大衆路線——人民公社化「運動」にお

ける中央と地方

第一節 問題の所在

第二節 人民公社化「運動」開始まで

(一) 中央

(二) 地方

第三節 人民公社化「運動」の奔出から後退へ

(一) 中央

(二) 地方

第四節 むすび

第八章 大躍進期の大衆路線——人民解放軍の毛沢東軍事

思想の学習

第一節 問題の所在

第二節 毛沢東建軍路線の復活

第三節 毛沢東軍事思想学習の批判対象——近代化の範

冊

第四節 毛沢東軍事思想学習の計画

第五節 毛沢東軍事思想学習の展開

(一) 時期と場所

(二) 学習参加範囲——階級

(三) 学習の実際

第六節 毛沢東軍事思想をとりかこむ政治的情況

第七節 むすび

第三部 一九八〇年代の中国共産党

第九章 中国共産党——一党独裁のディレンマ

第一節 はじめに

第二節 国民意思の集約

第三節 政策の決定と執行

第四節 国民の教育と統合

第五節 「新しい指導集団」の継承

参考論文 欧米における現代中国の政治およびコミュニケーションの研究

ジョンの研究

第一節 はじめに

第二節 現代中国政治研究のなかでのコミュニケーション研究

第三節 機能主義的研究

第四節 メディア研究

第五節 大衆運動研究

第六節 政治過程研究

第七節 意義、問題および展望

毛沢東死後の今日においても、中国共産党は毛沢東思想を継承する立場を明らかにしている。それは、毛沢東個人の思考の体系であるとともに、中国共産党員が共有する思考の体系でもある。その意味で、毛沢東思想ならびにそれに基づく毛沢東の政治指導を解明することは、現代中国の政治を理解するうえで、もつとも重要な課題である。

本論文の第一のすぐれている点は、このようにきわめて現代的な問題の解明に理論的・実証的にとり組んでいることである。小島氏は、毛沢東の政治指導の最大の特徴を大衆路線と大衆運動の不可分の結びつきのなかに見出している。小島氏が序章において展開しているように、大衆路線とは、大衆のもっている可能性に対する信仰に基礎をおいた大衆指導の方法である。それは、「大衆の中から大衆の中へ」という言葉に示されているように、党中央による政策の決定、中級幹部の指導と大衆の参加による政策の執行、大衆による意思の表出と党による大衆意思の集約、集約された大衆意思の党中央への再投入という一連のフィードバック過程である。

小島氏は、この大衆路線の実現形態を大衆運動のなかに見出

す。しかるに、毛沢東において、社会主義社会においても社会主義と資本主義との矛盾、あるいはプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争が想定されていたために、そこで行なわれる大衆運動は大規模な階級闘争という形態をとらざるをえなかった。しかし、現在の中国共産党は大規模な大衆運動を排しつつ、なおかつ大衆路線を継続する立場を表明している。小島氏は、このような大衆路線と大衆運動との分離のなかに今日の中国政治の問題を見出す。それは、本論文を一貫して流れる問題意識であるとともに、本論文における分析の結果から得られた重要な問題発見でもある。

大衆路線にかんじていま一つ注意すべきことは、大衆を構成する要素の恣意的性格である。大衆の内容は、それぞれの段階における中共の政策目標によって変化する。その意味で、われわれは常に中共の階級分析に注意を払わなければならない。小島氏も随所においてこの問題に目を向けている。

本論文の第二のすぐれている点は、きわめて現代的な問題から出発しつつ、その問題を中国共産党史全体のなかで展開していることである。従来多くの研究者は、毛沢東の政治指導方式の淵源を一九三〇年代後半から一九四〇年代前半にいたる延安時期に求めてきた。したがって、この時期にかんする研究は多い。しかるに小島氏は、中国共産党史全体を検討するなかで、毛沢東の政治指導の原型を、延安時期をさかのぼる一九二〇年代後半から一九三〇年代前半にいたる江西ソヴィエト時期に見

出している。このような観点に立った江西ソヴィエト時期の研究は皆無ではないが、本論文はもっとも詳細かつ体系的にこの時期を扱ったものである。そして小島氏は、江西ソヴィエト時期の経験を、一九五〇年代の中華人民共和国時期の大衆運動のなかで検証しようとしている。ここに本論文の独自性がある。

本論文にかんじて指摘しなくてはならない第三のすぐれた点は、一貫して毛沢東の政治指導を中央と地方との相互作用のなかで捉えようとしていることである。従来の中共研究は、中央のもっている権力への過大な評価、資料的制約などの理由により、主として中央指導部の分析に焦点をあててきた。このような研究状況にあつて、本論文は中共中央ならびに毛沢東の政治指導を地方・大衆との関連で分析しているという意味において高く評価されてよいであろう。より具体的に言えば、小島氏の主要な分析の側面は、(一)毛沢東の政治指導、(二)中央の政策決定過程、(三)地方の単位と幹部による運動の展開過程、(四)農民大衆の動向から構成されている。

そこでつぎに以上の三点に留意しつつ、本論の展開をみていくことにしよう。本論文は全体で三部九章からなる。すでに言及したように、序章は毛沢東の政治指導における大衆路線と大衆運動の関係を論じたものである。

第一部は、党の成立より中華ソヴィエト共和国にいたる時期に形成された毛沢東の大衆路線の原型を再構築しようとする。この問題を扱うにあつて、相互に関連した二つの問題が解明

されなくてはならない。一つは、大衆路線が農村を基盤にして展開したということである。その意味で、党の農村的基盤の問題が解明されなくてはならない。いま一つは、大衆路線が基本的には毛沢東の指導下で行なわれたということである。その意味で、党内における毛沢東の指導的地位の問題が検討されなくてはならない。

第一章は、一九三〇年代の中共の農民的基盤の問題を扱っている。プロレタリアートを革命主体と考える共産党にとって、農民を革命の基盤に据えるためには、多くのイデオロギー上ならびに組織上の困難を伴うものであった。

中共中央は、理論的にも制度的にも、地方党部に対する指導を前提としている。しかし実態としては、初期の党は、力の不足と国民党の弾圧のために、地方党部に対する指導性を發揮することができなかった。その限りにおいて、地方党部は一定の自立性をもっていたことができる。この地方党部の自立性は、党の階級的基盤と無関係ではなかった。成立当初の党は圧倒的に知識人の政党であったが、やがてプロレタリアートの比率が増大し、一九二七年以降農村への後退を余儀なくされると農民の比率が支配的となる。毛沢東の党内における権力への台頭は、地方における農民的基盤の拡大と結びついていたのである。

第二章は、一九三〇年一二月に勃発した富田事変を通して、毛沢東が地方の指導者として党内で台頭してきた一過程を解明

している。この事件は、実権を確保しようとする江西省西南部の党部と、その地域における指導権を回復しようとする毛沢東派との対立の延長線上に起こった。江西省西南部の党部を支配した反毛沢東派は、一面では毛沢東派に対抗しつつ、他面では李立三指導下の党中央にも抵抗していた。このような情況のなかで地方の自立性を保持するために、毛沢東は一面ではひとまず党中央の統制を受け入れつつ、他面では地方の土着勢力としての江西省西南部の党组织を支配していた反毛派を肅清していったのである。小島氏は、この事件そのものを解明することにも、事件の処理を通して台頭してきた毛沢東を分析している。

このような毛沢東の権力への台頭と党の農民的基盤の拡大のうえに、江西ソヴェト時期の大衆路線は展開したのである。

第三章は、一九三〇年代前半の江西ソヴェトにおける毛沢東の大衆路線の問題を扱う。この時期の党内における毛沢東の地位は非常に微妙なものであった。彼は地方のソヴェト地区を基盤として党内で台頭してきたとはいえ、党中央は依然として李立三とソ連留學生派の指導下にあった。したがって、江西ソヴェトにおける毛沢東の大衆路線は、これら党中央との対立と対応のなかで遂行されざるをえなかったのである。

小島氏は、毛沢東指導下で行なわれた選挙運動、土地革命運動、査田運動をとりあげ、党の政策動向、党の大衆観、指導方法とそれに対する農民の反応、農村の基層単位と中級幹部の動向の諸側面から分析を試みている。これらの分析を通して小島

氏は、「土地分配や生産拡大にみられる農民大衆の物質的利益の充足の重視、貧農団など大衆団体の積極的な政治活動の奨励、大衆の積極的参加にもとづく運動方式の政策執行、敵と味方の間の具体的な基準の設定による標的対象の限定化にもとづく味方大衆の団結促進、先進模範の発見・宣伝・学習による政策意図の大衆間の浸透促進などにみられる大衆指導の技術のなかに、萌芽としての大衆路線の理論と実践」を見出しているのである。このような大衆路線の経験は、延安時期、さらには中華人民共和国時期に一層大規模に展開されることになる。

第二部は、中華人民共和国成立以後一九五〇年代の大衆路線をとりあげている。ここでは一九五五年の農業集団化運動と一九五八年の人民公社化運動が主要な分析の対象となっている。

ここで小島氏の採用した方法は、まず党中央における政策決定過程とその過程に対する毛沢東の関与の仕方を分析し、つぎに中央で決定された政策が地方幹部を通して農村で実施される過程を中央、地方、農民大衆の相互作用のなかで分析することであった。

第四章は、一九五五年の農業集団化運動をめぐる党中央の政策決定過程を扱っている。一九五五年七月三〇日に閉幕した第一期全国人民代表大会第二回会議で表明された党中央の方針は、社会主義工業化に貢献する農業生産力の増加を重視した穏歩漸進的な農業集団化であった。しかし、翌七月三日に行なわれた毛沢東の講話は、農村における階級分化を憂慮した急進的農

業集団化を呼びかけ、それ以後農業集団化が急速に進展した。

毛沢東は自ら保持していた個人的権威を利用し、正規の中央政策決定機構を迂回してまず省・市・区級党幹部に呼びかけ、さらに農村の基層幹部、農民大衆の圧力によって党中央の方針を覆した。また、このような毛沢東の政策決定への関与を許容する雰囲気党中央に存在していたことを小島氏は指摘している。

第五章は、前章で明らかにされた、七月三十一日以後急進化した農業集団化運動の地方における実態とこの政策の推進をめぐる中央と地方の相互過程を分析している。小島氏は、このような農業集団化を促進した要因として、(一)毛沢東の個人的権威、(二)階級闘争重視の観点から運動に参加する農民の区分を明確にしたこと、つまり貧農と下層中農を中核とする方針を明らかにしたこと、(三)上級幹部の下放、郷党支部の整風、地方幹部の訓練、宣伝工作の強化などの党と農民との間のフィードバックを円滑化するための措置を講じたことを指摘している。とくに運動の展開過程で毛沢東の権威が決定的役割を果たしたこと、それがその後の大衆運動の基礎となったことを指摘している点重要である。

第六章は、中共中央における人民公社化政策の決定過程を分析している。一九五八年八月二九日の北戴河決議によって人民公社化政策が正式に開始された。それまで党中央において大躍進推進にかんする合意は成立していたものの、人民公社化の方針は存在しなかった。人民公社はまず毛沢東によって発見・提

案され、党中央において公然たる反対もなく容認された。小島氏は、このような政策決定を可能にした要因として、(一)地方幹部や農民大衆との直接交流からくる地方の圧力を党中央における政策決定に利用した毛沢東の政治指導、(二)大躍進の合意と急進的雰囲気存在、(三)中央の分権化と地方の集権化の権力状況、(四)幹部の下放、(五)整風の脅威のために急進的人民公社化に対する反対を差控える雰囲気存在したことを指摘している。

第七章は、前章で明らかにした党中央における人民公社化政策の決定過程をふまえて、この政策実施過程における中央と地方との関係および地方党部と農民大衆との関係を分析している。

人民公社化政策実施直前の農村では、基層幹部のなかに、党員数の不足、指導方法上の欠点、専門知識や経験の不足、大衆からの遊離、上級の方針の曖昧さからくる消極性という問題があり、農民大衆のなかに基層幹部への不満や大躍によってひきおこされた労働緊張への不満が存在していた。小島氏は、このような消極的情况を人民公社化の急進的政策の実施に転換させた背後には、毛沢東、省・専区・県の中級幹部ならびに農村の基層幹部の果した決定的役割のあったことを指摘し、毛沢東の政治指導を以下のように定式化している。「毛沢東は、かれの個人的権威の強化を背景に、地方と「大衆のなかに入り」、かれらの利益表出を発見する。一部の典型の実験にもとづいて作成した初歩的な利益集約Ⅱ人民公社化「運動」を宣伝し、地

方と大衆の支持と積極的参加を獲得する。かれらの支持の下に、若干の修正と体系化をへて「運動」を中央に「提案」して合意をひきだす。正式決定された「系統的な」政策Ⅱ人民公社化「運動」の規画をもって再び地方と「大衆のなかに入り」、かれらの積極的な参加を要求する。これは、いうまでもなく、江西ソヴエト時期に形成された毛沢東の大衆路線の延長線上にあった。

第八章でとりあげられている大躍進期の人民解放軍の毛沢東思想学習は、大衆運動を目指しつつも、それに成功しなかった例である。小島氏は、この試みが不成功に終わった原因を探るとともに、それが一九六〇年以降林彪の指導下で行なわれた毛沢東思想による人民解放軍の政治思想教育運動、さらには文化大革命に連なっていたことを示唆している。

以上の諸章において小島氏は、大衆路線の執行が一定の条件の下で大衆運動と不可分に結びついていたことを明らかにしてきた。残された問題は、現在の中共指導部が大規模な大衆運動を排しつつも、なぜ大衆路線に固執するのかということである。現在の中国共産党の機能を分析した第三部第九章は、その原因を中共の一党裁的支配の矛盾のなかに見出している。つまり、中共の一党独裁下で集約された国民的利益は、「人民内部の矛盾」か「敵対的矛盾」かの規準によって判断される。しかし、両者を区別する客観的規準はなく、究極的には党の恣意的判断に委ねられている。中共支配のこのような恣意的性格を回避するために、党指導部が大衆の意思を吸収する継続的努力をし

なくてはならない。しかし、一党独裁の下では党の意思に反する大衆の意思を吸収する制度的保障がない。大衆路線は、このような一党独裁の矛盾を正当化するための手段であったのである。

「欧米における現代中国の政治およびコミュニケーションの研究」と題する参考論文は、小島氏が本論を進めるにあたって参照した、中国政治の中央と地方の相互関係にかんする欧米の研究成果をまとめたものである。その意味で、本章もこの研究の一部を構成するといえる。

また資料についてみれば、本論文は、中国語の基礎的資料に加えて、最近中国で出版された種々の回想録、および地方の新聞を利用して点で評価される。

最後にわれわれは、本論文の一層の完成を期待して以下の二つの点を指摘しておきたい。第一は、すでに指摘したように、毛沢東の大衆路線の原型を江西ソヴェト期に求める点に本論文の独自性があり、この点は評価されてよい。そうであるとするれば、小島氏は延安時期にかんする既存の研究成果を江西ソヴェト時期との関連でいかに評価するかを示さなくてはならないであろう。いま一つは、中共の現指導部が毛沢東時代の大規模な階級闘争の大衆運動を否定している情況下で、党はいかにして大衆の支持をとりつけ、大衆はいかにして政治に参与していくのかということである。党は依然としてその政策を大衆の間に浸透させ、大衆の支持を獲得していくために宣伝、説得な

どの手段による大衆運動を展開しなくてはならないであろう。小島氏が今後中国政治の分析のなかで毛沢東時代とは異った大衆運動を解明していくことを期待したい。

このような問題が残るにしても、われわれは、本論文が現代中国政治研究の発展に十分寄与するすぐれた研究業績であることを認める。よって小島朋之氏に法学博士（慶應義塾大学）の学位を授与することを適当と考える。

昭和五十九年一月二十六日

主査	慶應義塾大学教授	法学博士	石川 忠雄
副査	慶應義塾大学教授	池井 優	
副査	慶應義塾大学教授	法学博士	山田 辰雄